

ジョルジュ・バタイユ／ロジェ・カイヨワピエール・クロソウスキー／
ミシェル・レリス／アレクサンドル・コジェーヴほか著・ドゥニ・オリエ編

『聖社会学 1937-1939 パリ「社会学研究会」の行動／言語のドキュマン』

兼子正勝+中沢信一+西谷修訳・工作舎・1987年・4,800 円

樺尾直樹

1. 本書の成立

本書は原題を Denis Hollier, Le Collège de Sociologie, coll. " idées ", Gallimard, 1979 といい、1930年代後半、ドイツ・ナチスによるファシズムの脅威下にあったフランス・パリ

を舞台として活動した「社会学研究会」のほぼ全痕跡を記したテクスト群である。第Ⅰ部 雜誌論文、第Ⅱ部 講演、第Ⅲ部 補遺の三部構成をとる本書は、講演草稿が作成されなかったもの、あるいは作成されても未発

見のものを除き、1937年から39年にかけての二年間に亘る<研究会>の動向を発表年月日順に追跡している（「ほぼ」というのはこうした理由による）。編者ドゥニ・オリエは、様々な雑誌に掲載された<研究会>による論文を収集し、残された講演プログラムをもとにそれらの草稿及びメモを探し出し、それがない場合には参加者の後日評や手紙、関連論文等を提示することによって、<研究会>の活動内容を当時のオリジナルなものにできるだけ近く再現しようと試みたのである。こうした編者の最大限の努力の下に編まれた本書は、各論題毎にオリエの解説及び註が施されているだけで、資料の意識的再構成によって<研究会>の学史的意義を確定しようと企図したものではない。むしろ、本書は我々読者に対して開かれている。

2. 時代背景—ヨーロッパ1930年代

<社会学研究会>の活動した時代、その「30年代精神」とは、ヨーロッパ世界への危機意識であった。ロシア革命、ドイツ・イタリアにおけるファシズムの台頭、世界恐慌と打ち続く世界史的事件は、30年代に生きる人々、殊に知識人に、資本主義体制の実質的崩壊、「伝統的共同体」の解体及びそれに伴う功利主義的個人主義の凌駕といった悲壯な状況をより明確に意識させたのである。全ヨーロッパ、否、全世界を巻き込みつつあった共産主義（Communisme）及びファシズム=二つの全体主義という30年代特有の「社会潮流」は、ある意味において弛緩し消滅しつつあるかとも思えた「社会的紐帯」の新たなる統合の試みであったが、同時期、情況の產物たるこれら両潮流の間で振幅しつつ思索し行動した者たちは、全体主義に対抗する形で、別の新たな「共同体」（Communauté）を希求し模索したのである。「共同体」の崩壊という認識と新たな「共同体」への試行錯誤、すなわち共同性（体）=Communの探求こそが、この時代の抱えた共通のアポリアであった。共産主義及びファシズムの運動に加えて、ダダ・シュールレアリスム運動等のアヴァンギャルディズム、マルクシズム・サン

ディカリズム等労働運動、社会科学・人類学・精神分析学・現代物理学に代表される諸科学に基づく運動など、錯綜する多様な課題を担った諸「共同体」が横断的に活動する。それらは「共同体」を求める「共同体」だ。時代のこうした「沸騰状態」のただ中にく社会学研究会>は誕生した。それゆえ、<研究会>は閉鎖的な共同体ではなく、諸集団の運動のいわば流動的な交錯点であったと言える。事実、<研究会>には、ブルトンに対抗するシューレアリストたち、ナチスから逃れパリに亡命してきたベンヤミンやフランクフルト学派のホルクハイマー、アドルノらが参加していたのである。

3. <聖社会学>とは何か

<研究会>の「共同体」主要構成員には、ジョルジュ・バタイユを中心にロジェ・カイヨワ、ミシェル・レリス、ピエール・クロソウスキー、アレクサンドル・コジエーヴが名を連ねている。そして、彼らが、共同体と反ファンズムの闘争のために選択した武器は「社会学」であった。彼らは自らの「社会学」を<聖社会学>と命名した。「それ（聖社会学=Sociologie sacré）は、聖なるものの活発な現前が生まれ出る社会的実在のあらゆる発現形態のなかで、この実在を研究しようとする」、「したがって活動の課題は、個人的心理現象につきまとう基本的傾向と、社会組織を司りその変動を律する主導的構造とをどこかの点で合致させることである。」（P.25）「この研究の主要課題となる三つの問題は、権力、聖なるもの、および神話である。」（P.33）第I部『社会学研究会』設立に関する覚書及び『社会学研究会のために序文』において、<聖社会学>なる彼らの「当面する活動の対象」と課題は、このように言及されている。本書のこの部分は、いわば<社会学研究会>の<聖社会学>宣言であるが、同所で彼らが自らの問題意識として次の二点を提起していることは注目に値する。

第一点は、当時の研究史的状況及び前述した30年代の情況に係る。すなわち、社会構造の研究はきわめて重要であるが、現状として

それは、「いわゆる未開社会の構造の分析に活動を限定するあまり、現代社会をないがしろにしている」と同時に、「達成された諸々の発見が今のところ、研究の精神や公準そのものを当然期待しうるほど根底的に変化させていない」という状況にたいする批判である。

第二点は、<研究会>という「共同体」のあり方に関する。上記の問題状況に対する批判に基づいて「可能なかぎり遠くまで探究を進めることを目指す者たちの間に、通常学者たちを結びついているものとは部分的に異なり、研究対象と、研究過程で徐々に明らかになる諸規定との毒氣を帯びた性格そのものに結びついた、精神共同体を発展させる必要」性が強調されている（P.24, 傍点はすべて引用者）。

彼らはこれら二つの課題を<聖社会学>に託したわけだが、彼らの問題構制の大前提がここから読み取られるであろう。それは、第一に<研究会>が研究者の共同体であると同時に「共同体」を求める共同体であるという確固たる認識、第二に、その存在認識を実現するための手段として選ばれた<聖社会学>が「聖なるものについての社会学」であると同時に「聖なる社会学」でもあるという認識である。<研究会>という共同体は、時代の危機を突破する尖鋭な剣として自ら聖化した「社会学」=<聖社会学>によって、「社会的紛糾」の弛緩してしまった伝統的・事実的共同体に活を入れながら、「聖なるもの」の顕現の中贈られる一体化、合一（Communion）に新たな「共同体（性） Communauté」を希求しようとしたのであった。換言すれば、バタイユが述べているように、聖なるものとはまさに「社会の共同性運動」（Mouvement Communuel）に固有の現象であり、それゆえ共同体（性）は聖なるものの顕現において志向／思考されねばならない、という認識論的前提が<研究会>にはあつたのである。こうして彼らは、第二次世界大戦前夜の熱い時代に、実存をその沸騰点にまで高めるべく共同体の試練を生きた。

したがって、以上からすれば、この新しい

「社会学主義」は、宗教現象の社会学的研究としての「宗教社会学とは異なって、単に社会学の一部分をなすものでは」なく、むしろ、「単に宗教制度ばかりではなく、社会の共同性運動全体を研究するもの」、つまり「積極的な意味で、共同性の価値を持つ限りでの、すなわち一体性を創り出すものとしての限りでの人間のあらゆる活動—科学、芸術、技術—を研究しようとする」ものであると言える。（第Ⅱ部「聖社会学および『社会』『有機体』『存在』相互の関係」、P.134, 傍点はすべて引用者）。

「聖なるものと共同体」という本書を貫いて流れる通奏底音は、第Ⅰ部「社会学研究会のために」における、バタイユ「魔法使いの弟子」、レリス「日常生活における聖なるもの」、カイヨワ「冬の風」及び「世界の危機に関する『社会学研究会』宣言」等を受けて、第Ⅱ部で豊かな装飾音とともに聴かれる。第Ⅱ部 講演では、軍隊、友愛団体、修道会、秘密結社、教会、政治結社といった「選択共同体（構成要素の側の選択によって生まれ、全体としての性格を示すような共同体）」に関する議論や、「動物の社会」、「民主主義勢力の構造」、「ヒトラーとチュートン騎士団」、「マルキ・ド・サドと革命」、「シャーマニズム」、「祭礼」等の諸テーマが、様々な共同体構成員によって取り上げられている。紙面の制約上、各論題の詳論はできないが、以下、<研究会>のメイン・テーマ聖なるものと共同体の理解を契機に、各論の共約可能性を探るために、「開かれた」特殊な性格をもつ本書の豊かな問題性の中から私が選択した二つの点を指摘しておきたい。

4. フランス社会学派の系譜とバタイユの「共同体」

ひとつは、<社会学研究会>の、フランス社会学派の系譜における位置についてである。彼らが、<聖社会学>を創出するにあたって共有した理論的支柱は、ほかならぬデュルケム社会学であった。それは、主要メンバーのほとんどが、デュルケムの後継者であるマルセル・モースの講義に出席していたことから

も察せられるであろう。本書には、デュルケムが直面した問題状況とそこにおいて思索され結実した「社会学的方法の規準」に関する言及が、至るところに見られる。彼らは、功利主義的個人主義の苛酷な時代にあって、人間を結びつける社会的絆、紐帶は如何にして可能か、という問題意識をデュルケムと共有しただけでなく、「デュルケムにならって社会的事実のなかに個人的行為の集合以上の何かを見るという点」を、認識論的、方法論的大前提として採用したのである（第Ⅱ部「現代世界の聖社会学」P.276）。そして、とりわけ重要な点は「聖なるもの」の概念をデュルケムからきわめて特異に継承していることである。デュルケムは『宗教生活の原初形態』の中で宗教を聖と俗という不均等な二項図式を中心に据えて定義した後、「未開社会」における宗教の社会的起源及び社会的機能を論じたが、<研究会>のメンバー、殊にバタイユは、世俗化、脱宗教化した現代社会ですら、否、そこでこそ社会的紐帶=共同体の合一的一体化の創出における聖なるものの果たす役割を最も重視した。（これは、デュルケムが道徳主義的、人間主義的解決を模索した点と対照的である。）すなわち、<研究会>はデュルケムの社会／宗教=聖なるものという図式から、社会と聖なるものとを直接結びつけることによって、デュルケム社会学の「聖なるもの」を奪取したのである。こうして、「聖なるもの」を冠した社会学、<聖社会学>にとって、聖なるものは単に宗教の領域に留るものではなく、「社会の共同性運動」、「人間生活における共同体的なものすべて」に固有の性格として認識されるに至った。この世俗化時代の聖なるもの=共同性（体）の追求は、神なき時代にあってあたかもデュルケムが『原初形態』で述べた「社会が自ら神となる」（上巻P.385）事態の再来であるかのようだ。

これはまさに、デュルケム社会学の批判的継承と言えるが、同じ観点から少なくともあと二点挙げができるだろう。まず、『社会学的方法の規準』第二章における第一

の基本的規準「社会的諸事実を物のように考察すること」に対する批判として、モヌロが「社会的事象はものではない」を著したこと（「マルジナリア」 PP.556-9），それから、第Ⅱ部「聖社会学および『社会』『有機体』『存在』相互の関係」で、バタイユが「複合存在」の概念によって、「諸個人のたんなる総和であることをやめ、諸個人の結合によって形成された体系」（=社会）の「固有の諸属性をそなえた独特の一实在」（『規準』PP.207-8）を捉え直そうと試みたこと、これら二点である。特に後者が、「社会は『複合存在』である」という命題から「共同性運動」なる社会に特殊なダイナミズムの概念を新たに導出した点は評価に値する。汲み出せば興味深いことがもっと出るだろうが、ここまで見た限りでも<研究会>がフランス社会学派の系譜に位置していることは明白であろう。が、この詳論及び<研究会>以後彼らの業績がどう継承されたのかは、今後の研究の成果を待つほかない。

いまひとつは、<研究会>の中心人物、バタイユに関する。バタイユにとって<研究会>とは、30年代に展開した幾つかの「共同体」の試みのひとつであった。最初の共同体は、ブルトンらとのシュールレアリスト・グループである。彼はそこからすぐに離反して反対派を形成した後、反ファシズム運動の目的で再びブルトンと和解し、「コントル・アタック（反撃）」を組織した。そして、その解体後<研究会>の非公然集団として「アセファル（無頭人）」を結成し、同名の雑誌を刊行した。1937年7月、「アセファル」第3～4号に『社会学研究会』設立に関する覚書」を掲載したことを期に、事実上活動の場を<研究会>に移し、本書に見られる活動を開始したが、バタイユ、レリス、カイヨワ三者の「根深い不一致の表明」と独仏戦争の勃発によって1939年の夏で<研究会>は解消てしまい、残された最期のあがきとして「ソクラテス研究会」が結成されたのである。こうした「共同体」の要請と試練は、戦後に発表されたバタイユの著作の中で、可能な限りより

深く生きられたのだが、それについては別稿で論ずることにして、ここではただ彼の「共同体」の歴史のみを記すにとどめる（「社会学研究会関連年譜」参照）。

5. おわりに

以上の論考から本書の意義を考察しよう。研究史上、<社会学研究会>はフランス社会学派の流れの中に位置付けることができる。しかし、<研究会>のフランス思想に与えた影響はおろか、活動時の全体像すらいまだ明らかにはされていない。今世紀、ウェーバーとデュルケムによってその基礎が築かれた社会学の歴史の中で、この<研究会>の残した業績は、いわば学史上のミッシング・リンクと言えよう。それゆえ、本書の出版は非常に重要な意味をもち、我々に考察する契機を与えてくれる。また、それと同様に、それ以上に特筆すべきは、我々自身、30年代が抱えた同じ問題状況に依然として置かれており、おそらく当時以上に複雑、困難な課題を背負っ

ていることを、本書が改めて再認させてくれるということであろう。この「開かれた」テクストには、さらに汲みつくせない意味があるだろう。もちろん、それらも我々の今後の課題となる。

最後に、翻訳に関して《Conscience Collective》が「集団意識」と訳されているが、これは定訳「集合意識」に改めるべきであろうことを付加し、<社会学研究会>の活動の再現に尽力した編者オリエと、この意義深い訳業を果たされた訳者諸氏に拍手を送り、この稿を終えることにする。

参考文献

- 河野健二編 『ヨーロッパー1930年代』 (岩波書店) 1980年8月13日
M. ブランショ 『明かしえぬ共同体』 (朝日出版社) 1984年10月25日
J - L. ナンシー 『無為の共同体』 (朝日出版社) 1985年5月25日